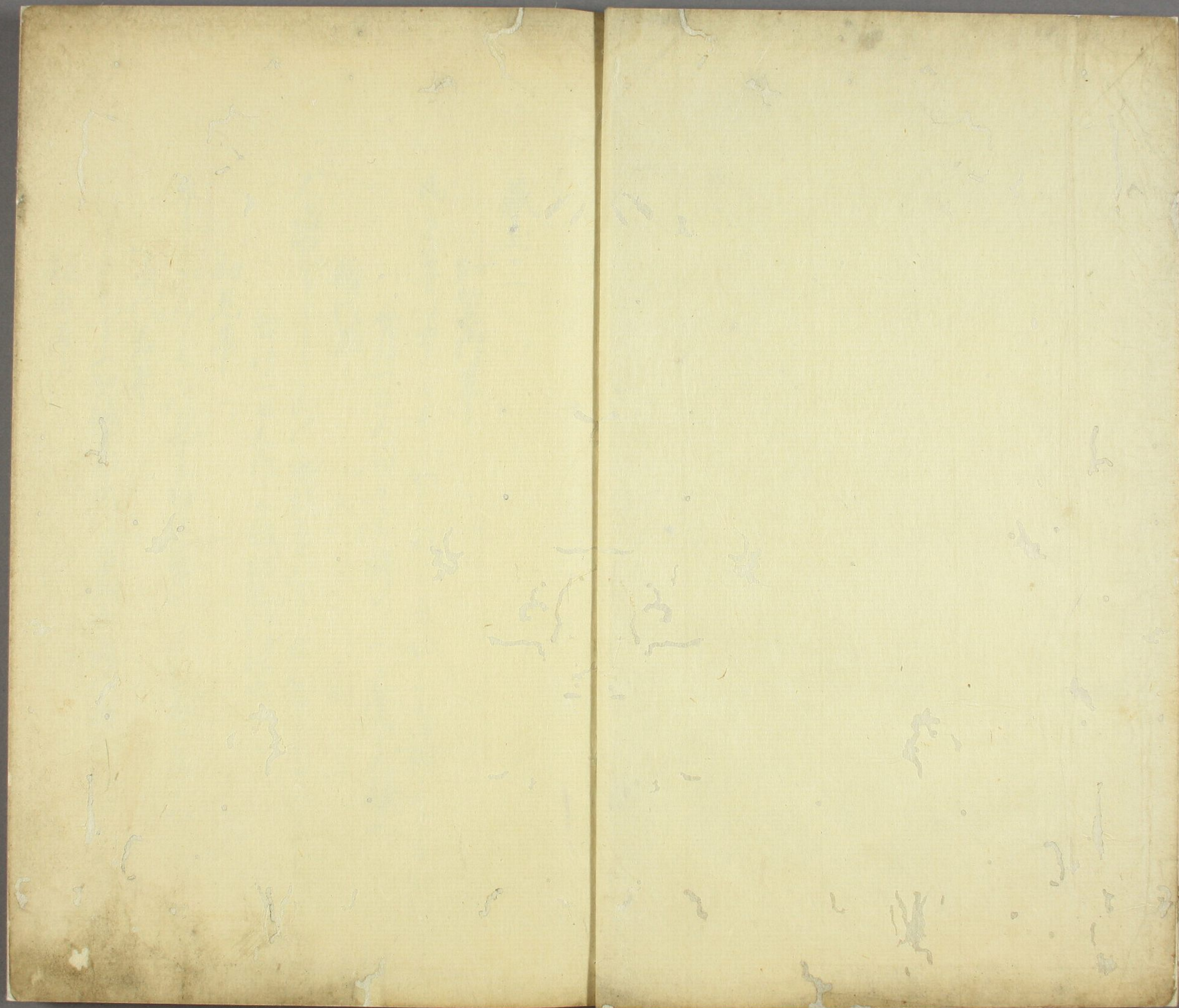


蔵玉三

完





藏玉三

年真記

大根 加賀市草

向う草の中みそくやまの草やうし由綱よきも人伝は
五月一日大内みそ餅のふもく大根也

同 門松 初代草

大内やうしゆこれ初代草いしむをふもくしゆん
五月二日大内よ植松也門松也

天智天皇花蓋異名入 初見草

同前 若菜 子代若草

いほももくもくも摘ん子代若草由綱れ種のかとくもく
根白草



同
耳に立波はく花不根白草は我神は雪ハ梅ハ梅
二月中旬梅也
吾散見草
中木時節相当アリ順徳院御作

山置の柳瑞々さけのささ草さささささ
尋深草
十一ノ月七日先ニ咲
吉野アリ夜出現云
雲井梅トモ又人九梅トモ云

為り着せ山は海に草花さささささ
柳
風見草

同
齊宮前裁合
何つら草花はさささささ
春薄
花及異名

同
滑るれあまらさささささ
同
風無草

同
松よのささ草花はさささささ
同
河草草

天智天皇花盡異名吉野龍峯籠ニリ

浪は吹せさささささ
楊

同
人並てあまらさささささ
同
化名草

同
何さささささ
同
他者化草

同
雲さささささ
同
日向草

同
いささささ
同
一夜草

同
一草草さささ
同
野へノ昔ト云物持アリ順徳院御作

同
ひささささ
同
或人道とゆは向いて廣野小見と

常して草の中にもよく見ゆるを採りて
神に供はる杭を引くはしむるを敷くはしむる
わきよふる杭を引くはしむるはあまの子也はしむる
ついでに引くはしむるはあまの子也はしむる
ついでに引くはしむるはあまの子也はしむる
ついでに引くはしむるはあまの子也はしむる
ついでに引くはしむるはあまの子也はしむる

一葉草

野ニヨイテ男又彼夢ニル振ニ我オノ野ヘノ草陰ニアリケルヨシニテ伴ノ草ヲ
ユラスニヨイテモトメケルニ又鳥ノカイヨアリニヲ取テ飯テ彼スミレノ本ニウツマリ

あまのついでに引くはしむるはあまの子也はしむる

これ草を人にとりてはしむるはあまの子也はしむる

二葉草

ゆき草今もさういふ人やあまのついでに引くはしむる

せうりこは社路のまきよこの奇を採りて
ついでに引くはしむるはあまの子也はしむる

三間草

天智天皇花名 拾遺部ニ入リ八元日拾遺部ニキサミテ水ニ入ヨリ春ニル

この草はしむるはあまの子也はしむる

四間草

この草はしむるはあまの子也はしむる

八角は法世の草也

花見鳥

泉式部採出花名 夫々草はしむるはあまの子也はしむる

火取草

齊宮花名 夫々草はしむるはあまの子也はしむる

雁

二季鳥

忠孝 出 名 長秋 物也

何方とあるはくく二季も年ふこいゆらう

曾丹 出 春夏ニカハル草ナレハ二季ナトイハリ

二季草

草花をら花も人もや二季草松のこまうらふ草は

同

蕨草

式子内親王 出 信

松の枝の緑も人もかひりこくうい草も人のこい

同

松見草

天智天皇 花 尽 矣 矣

そよやまのこい草も人もかひりこくうい草も人のこい

御土忠草

同

ふら草のこい草も人もかひりこくうい草も人のこい

桃

清酒古草

天智天皇 花 尽 矣 矣

飲人やまのこい草も人もかひりこくうい草も人のこい

三月三日の表よりい草も酒入るは桃也

同

三千代草

い草も酒入るは桃也

い草も酒入るは桃也

同

日草

種崎く畑やまのこい草も酒入るは桃也

蕨

山根草

同

い草も酒入るは桃也

山吹

面草

い草も酒入るは桃也

昔男女わらうは桃也

うはしりくは後をうらむと筆をふらり山吹せ
かゝるくまの巨細忘衣の物語より

昔大和国奈良原ト云所ニアル男山城国イテノ里ニヌム女カヨヒケリ
互ノ心サシ不浅ヨ互親シカリテ初男女云ケル志路海切今ヨリ八會ヲ
不可叶ト云テ鏡ヲトリ出テ互ニ面鏡ヲウツシテ若并會ヲアラン
時ハ此鏡ヲホリ出スヘシト云テ離ノトニウツム後ノ并ノ志此所ヨリ
歎ク生出タリ男アハレニ思テ不効此所ニ福ヌミテ歎ケル親は
ヲサメテヒライテ鏡ヲホリ出テトキテ又ウツム其年ノ秋又大和
ヨリ槿花生出タリ其時此男サテ他ノ心アリトテ忘ケリト云

同
鏡草

面をうらむくまの巨細忘衣の物語より

子細同前

夏

卯花
初見草

天智天皇花見集
くまの草をうらむくまの巨細忘衣の物語より

雷見草

おのろくろ我袖をうらむくまの巨細忘衣の物語より

同
塙見草

同
あまの草をうらむくまの巨細忘衣の物語より

葵
形見草

同
我思ふはうらむくまの巨細忘衣の物語より

唐の五草とこのこと百草と人ら
あまの草をうらむくまの巨細忘衣の物語より

アヲ千
雲見草

同
心杜若とく新くたしむる草ありしとてしるしあり

齊宮花冬杜若 白草

交杜若のありし中ありし草ありしとてしるしあり

後杜若 石竹

庭杜若 庭古草

昔東國より西國の時とて云々曾しりし我々の
山止り石ありはるし並にりし人といふありし
仍時之伴の石を射別ありしと云々
しるしとてしるしありしとてしるしありし

橘 庭古草

天智天皇花冬杜若 庭古草

齊宮花冬杜若 同 昔草

代々とて宿の荒り昔草もとてしるしとてしるしあり

基杜若 秋待草

水杜若 水鏡草

天智天皇花冬杜若 同 池見草

水杜若 水鏡草

同 露草

水杜若 水鏡草

同 水鏡草

水杜若 水鏡草

同 水鏡草

水杜若 水鏡草

庭堪草

俊頼後 五月あやしくとて庭堪草なりと云ふも夕ぐれ
のまはる月あやの庭をさすなり也

基俊哥

松

菘草

任右や庭の何よりれ菘草長井と云ふも何かよからして
任右のを里は五位の松と云松を枝松なりぬりて
菘と現してしと云ふなりよらと云ふも現をさす
ぬりて松の葉とありと云ふなりぬりて菘と
我庭にさすの松なりと云ふも菘の葉なりぬりて
さすなりぬりて菘と菘草なり也

松ノ葉名ヲ友部ニ入ル不ぬ葉但皮取ト現セシム五月也仍夏ニ
入ル友松友松約住吉アリト云ル菘草菊六秋ノ風也待テ也

葦

氷室草

天智天皇花名氷室 氷室草なりぬりて氷室草なりぬりて

菖蒲

吹草

万葉 吹草アヤメ草ノ年祝古今注并色葉已トニアカサリ 吹草なりぬりて吹草なりぬりて

姫百合

光草

友部と云ふも吹草なりぬりて吹草なりぬりて
是と姫百合と云ふも吹草なりぬりて吹草なりぬりて
かにか書のかと云ふも吹草なりぬりて吹草なりぬりて

堂

火借草

夜半草 夜半草なりぬりて夜半草なりぬりて

同

夜半草

よき草きき川にたぐりまはしうけれ田さく月あまら

不加見草

万葉

みくらりいけりしとのゆき草むの比やんかしくみくは

はむのく日敷大日也仍女日草とを号

且見草

同

今らるくのけりし心の藤をう浅きまの止らん草部

名取草

形仲并 牡丹

おんのらあしや名取草むらん時きこうもしくけ

昔あまはむとけりしあかりくんとて畫に終日
よるり言り敷夜風より換れと歎くゆま
ゆりて男地らけりし離あふりけりるるん仍名取草号
こゝろさしてまのこゝろさるるん仍名取草号

夜白草

大豆

天智天皇元年

畫の田にさしむる夜白草がうそゆあをたれゆり

是と牡丹しりて流けり大日靈以奇ん可了簡

山前草

木角草

いけりし風のむいけり花にけりやを吾とくわ

散り理草

同

煩るる風もやらんけり草むれをばねしゆり

涼草

同

るる蟬心のきりしはこもけりし草部れ風も夕く

手刈草

同

てるれ草人のかきしはたふりけり涙のそくあけりけり

風折草

同

庭の草

朝も夕も此の草や風流草てなうし 神も月をおもひ

同 風字草

朝も夕も此の草や風流草てなうし 神も月をおもひ

秋

萩 初見草

宇よやそ庭をどの所か 初見草此の友の結ぶまふ人

同 庭見草

垣移れ何れかこの庭に草刺し立寄人をもつとけ

同 古枝草

西行 宮城野アリ 木もや庭をどの所か 古枝草てなうし 秋も花も咲き

同 秋連草

人元 人元 旗も草もや庭をどの所か 秋連草てなうし 旗も草もや庭をどの所か

同 紅深草

奇宮花 奇宮花 庭をどの所か 紅深草てなうし 庭をどの所か

露曾草

我宿の庭もどの所か 露曾草てなうし 我宿の庭もどの所か

紅葉鳥

志 志 庭をどの所か 紅葉鳥てなうし 志庭をどの所か

萩屋草

天智 天智 庭をどの所か 萩屋草てなうし 天智庭をどの所か

同 秋恋草

後成 後成 秋恋草てなうし 秋恋草てなうし 後成秋恋草てなうし

同 山下草

寂蓮 寂蓮 山下草てなうし 山下草てなうし 寂蓮山下草てなうし

同 風持草

奇宮也凡々矣
そら花小吹らばもさゆはて風らし草とあそぶ

同 男草

堀川院内木ノ合ニ時矣
そら花小吹らばもさゆはて風らし草とあそぶ

家隆 同 祢見草

秋のついでにさよふも祢見草風や夕らけ

同 同色草

二條院後及
詠之由 祢見草 神妙なる草とあそぶ

濃露草

天智天皇也
花のふれ子将の中濃露草衣とあそぶ

八月中旬千種也

松 色無草

中句ト云定テ草木味氣お苗記アリ
順徳院小撰也

そら花小吹らばもさゆはて風らし草とあそぶ

松ノ色十斗ト号テ秋ノ部ニ被入事ハ草木異名被合後鳥羽院出時
立田山時雨モ 色無草風ニヤ秋ノ音ヲキクニ依此草被入

ツタ 同 松無草

奇宮花冬矣
そら花小吹らばもさゆはて風らし草とあそぶ

同 庭忌草

吹風のそらや庭忌草むい草端れそら火れ草

同 夕草

夕草の草れ舞るそら夕草草と何のいゆら

同 鏡草

明鏡草の草れ舞るそら夕草草と何のいゆら

基俊寺

思草

天智天皇御記

今昔物語云々
如郎花を思草といふ事
くしよんくしよん天智天皇御記
りり又云んくしよん但し
草と云んくしよん
梅と云んくしよん

忘草

紅葉
私勅俊頼老テ身ノウキヲモ今ハ忘中風吹テラハ命アラシ
紅葉百首アリ

色見草

紅葉

私勅俊頼老テ身ノウキヲモ今ハ忘中風吹テラハ命アラシ

妻恋草

同

後草

同

百夜草

同

大和三輪里ニ老翁アリ彼庭ニ一本ノ菊ヲ植テ此翁モテアツク此菊秋

冬過テ春夏迄モ花モ葉モカラス所ノ者不審シテ尋聞ニ自七月
一日毎夜菊ノ下露ヲ器物ニウケル事百夜也毎月此花ヲ竝依之
此菊四季ニカラス仍百夜草号

水鏡草

七月十五日ノ忌水也
水鏡草

清補奇
星見草

星見草
一字論アリ

草論式アリ
手向水

手向水
一字論アリ

竹露
夕玉草

夕玉草
竹露

竹
河玉草

河玉草
竹

天智
次波草

次波草
天智

菊
形見草

形見草
菊

此菊ハ奥列新妻里ニアリ因縁無常也新妻ト云物語ニアリ
業平作是ハ菊ト云ニツキテ秋ノ部ニ被入カ秋物語ニ十月
中五日比トアリ然者冬

冬
初見草

初見草
冬

此初見草ニ説クアリ寒草 霜トイヘリ
今朝コノハ遠山松ニ初見ササヤ日影ヲクモト思ハシ
夜ノ程ニ秋ノ立枝 初見サモトミシ秋ノ色モノコラス
寂蓮 頼改

霜見草

霜見草
同

同
いふ代會一松のまうけれおん草いへる時と誰もあらず福ん

西行哥 同 雪見草

天智天皇花冬 同 秋草

冬草 初名草

同 浮草 鏡草

同 浪草 水面鏡

日の子けよあれふさうとらり氷れ熱も延草

川よらり是と御さるる哥未及見

親子草 又ハニツリ葉

同 雪 六花

師光弁 冬風ゆきしてらう六むの手折袖も雪れか

六花のもよあ初編抄くわら後房化

春ニ梅梅 冬よ別三冬雪

秋一菊 夏卯花 雷りくくも

友吉のゆ依為凶事六むハ不入

雑 豊喜合草

同 豊千代草

同 松のやんく時とあこ世草ハ一宿れ唐もあは

志くすふゆわわえの音ハ草枯らけりしむのさる

花散しもれ名らうりに秋草草かうらうともは今の草玉

あ代くさける中あも初名草まともてやせとく

浪さうい河まはうあーか之草まぬれ氷のいせか

日の子けよあれふさうとらり氷れ熱も延草

川よらり是と御さるる哥未及見

親子草 又ハニツリ葉

同 雪 六花

師光弁 冬風ゆきしてらう六むの手折袖も雪れか

六花のもよあ初編抄くわら後房化

春ニ梅梅 冬よ別三冬雪

秋一菊 夏卯花 雷りくくも

友吉のゆ依為凶事六むハ不入

雑 豊喜合草

同 豊千代草

同 松のやんく時とあこ世草ハ一宿れ唐もあは

同 延喜草

去つや吾も此の世に草むすまらるるに

心 夕見草

松よぬきこふをけく夕見草月やこふのむし

同 朝見草

夜しつら月を山れ朝見草とここの秋も

同 折見草

何ん草枝もやあんとこふをさるるあつる

同 眩見草

るるゆきしを花と人くと眩見草あつる

同 物見草

物見草神のさるるをけくく傲と

同 目覚草

山里の曉この松の枝や目覚草

同 寝覚草

何とほして終るるしむ神の草んれ

同 恋草

かぬい子来や何そ恋草れ終るる神の

同 問世草

月をてきこひかひし問世草しるる

凡草しつら草もくかうと或はとく或
しいぬき草さしつして物れ終るる
草しつら文字とをさるると道来兎角

異名

梅 古野草 同
 松 河草 同
 柳 常磐草 同
 梅 曙草 同
 萩 風洞草 同
 萩 富草 同
 梅 白草 同
 松 曇草 同
 梅 富草 同
 萩 かき草 同
 萩 玉見草 同
 萩 日暮草 同
 紅葉 風待草 同
 紅葉 龍田草 同
 萩 幸草 同
 萩 文見草 同
 梅 日暮草 同

明日くういそとをれ小田は袖あまて富草れさ
 るふくつしうも神代の橋れも天神のつら田
 わらの里から田もたそこのをれさる何れぬ
 らこゆとくから始る時の橋れもあらのさ
 草かきくさくせも云也は橋めく飯
 るふといぬ也

夕飯

あそり草

菊

子代見草

同

軒草

昔陸國三兄弟

雲よりさう互名草と書あまの村先座あのか
 とつたとこにけしあまのつじあり互は系
 みくさくさしーしーいさうりや海世まらして
 下向しては草と極さうけ系二みかーあ
 いつをわさ枝さうりにむ咲るむあん

檜

あけ草

同

うら草

苧

ふら草

同

のころ草

雉

うら草

鷹

あそり草

鳥

日草

時鳥

くら草

時鳥

橋草

同

はら草

時鳥

こ井草

鴨

喜相草

同

むら草

男麻

人草

鷓鴣

福草

鶉

小花鳥

魚

水虫

若菜船

日本紀

中の人

神本権

板立也下心也

日本紀

何さつ子

雷傳抄

足き

日本紀

夜也

夜也

鵬胡

一字論

見ノ者也ノカタクノ各ヲ多クナリ
現葉抄
鵬胡也云々
鵬胡は云々
鳥の一種
一字論

鶉

ゆきあき鳥

海士

のやこ人

波名

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

ゆきあき鳥

奥義抄

立漕下云心也
カキキイシ
鵬胡は云々
鳥の一種
一字論

いさよふし

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

鶉

天の夜橋
風葉抄
冬物
春物
秋物
縮妻
今松物
竹杖
威切
秋朝

月 志海

志海

舟 志海

浪名 志海

志海

古堂 志海

アツク 志海

志海

仙人 志海

草垣 志海

志海

車 志海

船日 志海

志海

碓 志海

筆 志海

志海

碓 志海

相 志海

志海

碓 志海

一紫草

志海

碓 志海

十二月 庚名

後鳥羽院時十二月庚名

心 初望月

霞初月

初春月

自万葉集勘出

志海

御製

同

志海

定家

同

志海

家隆

同

二 梅見月

小春月

衣更著

同

志海

有家

同

志海

日本紀

志海

友
雲雀
三 花見月

梅月

春惜月

御製

万

しと早にやとをむしののむらん月多てんをけりてをわん

定家

同

多てしに盛やとらん多梅月しとくりてらんを芳れ山の留

家隆

同

転るくぬ少しと思ふしと思ふ言ひはれ去たけり月

元春ノ中ニ三月ノ春下号

郭公
灯花

四 卯花月

得鳥羽月

花残月

長明

同

おんふさしとをらん時鳥卯のむ月秋さうりてけり

家隆

日本

友も友のしとをぬ心の下りやわらんふせり母の月

御製

万

言くく志のぬ少やんぬくく夜もかくるを花残月

橋

五 賤男染月

月不見月

梅月

吹喜月

定家

日本紀

いづこも友の小笠とけりて申し志のぬれをらん五月留の止

昭昭

万

わりのぬれりてみくぬをうや月みと月とりのくをを

家隆

同

多てけり梅月志のぬとらう多志けり昔の思ひをうて

長明

同

月やうとを初言けりて吹喜月けりてうとらうりて

常夜

六 風待月

鳴雷月

常夜月

日 松の葉は庭をくぐりて空をうらやみ風は月夜をくぐりて

定家

同 夏多にゆく道やうらやまの月のあも成ぬ夏や常盤

伊勢

万 ちよとくはいふふとてん帯夏は月夜をくぐりて

結

七 文枝月

七 夕月

女郎花月

有家

同 七夕は逢坂の宿を星をくぐりて文のあはれ

家隆

万 かさくさのうらやまは橋をくぐりて七夕月の光をうらやま

源昭

同 七夕の装うれはふふとてや名をうらやま女郎花月

麻

八 妹風月

月見月

紅葉月

定家

同 萩の葉は庭をくぐりて空をうらやま風は月夜をくぐりて

長和

同 名もかきく娘のすれを晴て芝のうらやま月見月

有家

同 ちよとくはいふふとてん帯夏は月夜をくぐりて

藤

九 紅葉月

小田列月

秋葉月

伊勢

同 立田のうらやまは橋をくぐりて七夕月の光をうらやま

源昭

秋三月ノ中トリワキ秋ト号ス八月也

同 さらさらの鳴きこゝしの夜ふけに神打くくぬ小田列の月

家燈

万 いく夜うおりの枕の祢是月秋よいあそこのあそこの夜とく

着 十時雨月

拾月

初霜月

定家

同 友とくく本紫のほれ何毎月をを初よ何とほり

形始

同 娘のとれかろうくそわろ拾月よほらうれはるる来は

長明

万 多とよし初霜月れ初はく字さうと白く抄入の書

不審 リツタン 十一 霜降月

神樂月

雪見月

竹籠

落葉千鳥

同 風をよおぬり月れ光うりやあそこく人しく書きしん

定家

同 ちよめさくし甲おれま右の祢是月立柳葉のまはわいけ

有家

万 くらうつらそめの志海しよるん月と初くそをわくそをん

梅 十二 春待月

梅初月

三冬月

長明

同 昔より年い身にまをるれまはる月れそく

形始

同 花におたげを枝うとゆれをて梅ころ月をいふとゆく

定家

同 春三月の中は月ヲ冬トナ 春のつゆをいふくして三冬月いそくにつくそ書れのけい

世外月異名雖之多此詠歌矣名者自日本紀
并万葉集勅出也可秘之自餘者皆以體
奇不分明云

其

鹿苑院殿

陳故攝政良

三守

以一卷者自室町殿草木異名事依請
申被注進清書之時密寫留者也若有
風聞者可為生涯更不可出懷中尤可秘云

